

3.2. 子どもに関する人生儀礼の意義と変遷－育児雑誌の記事分析から－

田口祐子

はじめに

子どもの成長の節目に行なわれる儀礼であるお宮参り、お食い初め、初節句、七五三などは、現在広く知られる祝いとなっている。実施率の高いものも多く、ミキハウス子育て総研が子育て中の親を対象に実施した子どもの祝いに関する調査で、祝い実施の有無について「行なった」と回答する割合は、お宮参り（2015年調査）では82.1%、お食い初め（2018年調査）では70.4%（「これからする」を含めると78.8%）と高い数字となっている¹。

このような子どもの成長の節目に行われる儀礼、つまり子どもの人生儀礼に関する実態は短い間に大きく変化することも珍しくない。七五三を例にとるならば、1970年代には各家庭の事情に合わせて祝うことができれば祝うという形が主流だったのに対して、1980年代には子どもの着物レンタルが普及する中で祝い方が豪華になる傾向がみられ、さらに1990年代初めから登場したこども写真館によるわかりやすい金額設定や前準備不要なサービスの普及もあり、七五三を祝う家族の裾野が広がっていったという流れがある²。

着物レンタル、こども写真館といったいわば儀礼産業が子どもの人生儀礼の祝い方に広く関与するようになり、古くは各地域、また各共同体で継承されていた祝い方が、現在は儀礼サービスを提供する側とそのサービスを利用して祝う側との間のいわば需要と供給の関係などによって、七五三に限らず短期間でその内容を変えることも珍しくない。

筆者は、このように短い間にも変化し続けている現代の人生儀礼のあり様やその意義を確認するために、その内容の変化と、それに対する人々の思いについていくつかの方法で記録しつづけている。

現在親たちにとって、多く利用される子育てに関する情報源としては、ママ友との情報交換やインターネット・ブログのほか育児雑誌も利用されることがみられるという³。育児に関する情報源のデジタル化が進む中、紙の媒体である育児雑誌は今も利用される媒体である。

¹ ミキハウス子育て総研では、育児支援サイト「ハッピー・ノート.com」を通じて、子育て中の親を対象にアンケート調査を継続して実施しており、ここに示した祝いに関する調査結果はその一部である。お宮参りに関する調査は2015年10月実施でn=278、お食い初めに関する調査は2018年5月実施でn=702

² 田口祐子「付論 現代の七五三の変遷に関する一試論」『現代の産育儀礼と厄年観』岩田書院、2015年、p220-239。

³ ベネッセ教育総合研究所が2015年に行ったアンケート調査「育児に関する情報源」より。この調査は首都圏に住む0.5歳から6歳前後の子をもつ親を対象に子どものしつけや教育についての情報源を聞いたもの。母親の友人・知人（ママ友）70.7%、インターネットやブログが65.4%で多く、育児雑誌は42.0%となっている。

天童睦子は「育児雑誌は、親の子育ての悩み、子どもへの関心と戦略（ここでは育児意識と育児行為、さらには社会に構造化された暗黙の戦略を指す）、育児の市場化など、現代の育児状況のさまざまな側面を映し出す。」（天童 2004：ii）⁴としている。そこで本稿では子どもの人生儀礼のあり様や意義について考える上で、育児雑誌の記事の情報収集を試みることにした。

本稿では、子育てをする親たちに長く読み継がれてきた育児雑誌の中で最も歴史が長く現在も刊行されている『赤ちゃんとママ』（1966年創刊）⁵を取り上げ、その中の子どもの人生儀礼に関する記事を抽出し整理する。長期にわたって発行され続けている記事の中の記述等から、現代における子どもの人生儀礼のもつ意義と変遷について確認していきたい。

1. 1960年代後半からの育児雑誌に関する動向とその背景

婦人雑誌の記事の一部であった妊娠・育児に関する情報が、育児雑誌として発行されるようになるのは1960年代後半からである。1960年代後半から70年代前半は、日本において「近代家族」の理念と形態が一般化し、主に都市の家庭では夫が賃金労働者として外で働く一方、妻はそれを支える専業主婦の役割を担う存在となり、性別役割分業システムの中で家事・育児を割り振られることとなった。それまでであった育児に関する伝承経路が失われ、若い母親たちの育児知識への関心は高まることとなり、育児雑誌はそのような状況の中でさかんに読まれるようになる。

戦後の育児雑誌の登場と隆盛は、育児知識と文化の伝達が人づてに伝えられるだけでなく、情報メディアを通じた新しい伝達様式として一般化したことのあらわれと位置づけられる⁶。

天童らの研究を元に戦後からの育児雑誌をめぐる動向をみていくこととする⁷。

戦後にさかのぼると育児知識については保健衛生政策のもとで、「科学的で正しい」育児法が上からの「権威」として垂直的に伝達されていた一方で、民間伝承による水平的な育児知識を「非科学的育児法」として退ける論調があったと指摘されている。そのような状態から1960年代になると、「科学的知識に裏づけられた医学的知識を伝授する育児メディアと、伝統的・慣習的な育児法とが混在し、母親たちをアンビヴァレントな状態に陥れる傾向があった」（天童 2004:25）という。

⁴ 天童睦子ほか『育児戦略の社会学 育児雑誌の変容と再生産』世界思想社、2004年。

⁵ 『赤ちゃんとママ』（赤ちゃんとママ社、1966年創刊）で現在も発行が続く月刊育児雑誌。詳しくは本稿の第2章参照。

⁶ 天童は「育児知識」を育児にかかわる価値、信念、情報、処方的知識の総体と定義し、ある社会、時代、地域、文化等によって変化するものであり、このような育児知識に基づく育児行為は、個々の家庭や親の育児・教育方針のもとで規定されるだけでなく、社会や文化において共有された知識の伝達と再生産にかかわる社会的行為であるとした（天童 2002: 115）。

⁷ 前掲4と天童睦子ほか『育児言説の社会学 家族・ジェンダー・再生産』世界思想社、2016年。

この流れの中、3冊の育児雑誌、1966年『赤ちゃん和妈妈』、1969年『ベビーエイジ』、1973年には『わたしの赤ちゃん』が創刊された。それまでにもあった専門的な育児知識の伝達媒体となっていた育児書が、やや高学歴層に読者層が偏っていたのに対して、平易さ、読者の共感を基盤とした身近な話題の多い育児雑誌が幅広い読者層を獲得していった。市場としての有望性を見込んだ出版各社が育児雑誌界に参入し、育児雑誌の種類は、80年代初頭には約10誌程度だったのが、2000年代には約60誌程度にまで増加した（高橋2004：46）⁸。

1980年代育児関連雑誌はブームを迎え、その内容は多様化した。例えば子どもの年齢段階を分けて、3～8歳児向け、1～4歳児向け、乳幼児の母親向けなど複数の雑誌が出版されるようになる。80年代は女性の晩婚化、晩産化が進行した時期である。女性たちの間で職業キャリアを視野に入れながら、結婚・妊娠・出産の時期を自己選択する意識の広がりがみられた。かつて自然の営みとして自明視されていた子どもを産み育てることが女性のライフステージにおける一大イベントへ変容したという。

80年代の育児雑誌にみられた別の変化として、「育児の市場化・モノ化」がある。70年代からみられはじめた育児関連商品の広告や関連記事は、80年代に入って新たな産業分野「子ども市場」「キッズビジネス」⁹に関連した商品、玩具、アパレル、学習教材、食品、飲料、ベビーシッター、情報など育児用品から受験産業まで、子どもを取り巻く商品を取り上げるようになった。そうした中で育児雑誌は次第に育児グッズの情報誌としての意味合いも持ち始め、広告ページの比率も増加した。

1990年代にベネッセコーポレーションから出産期向けに『たまごクラブ』（1993年）、育児期向けに『ひよこクラブ』（1993年）、1歳半から3歳児の子をもつ親を対象とした『たまひよ・こっこクラブ』（1996年）が創刊され、2000年代に入るとこれら3誌の合計発行部数は毎月78万部を超えるまでとなった。この3誌にみられた共通の特徴は、「読者の共感」にもとづく「本音の育児」を前面に打ち出した点にあったという。それまでの専門家による権威的・正当的なメッセージよりも、読者の体験に基づく「参加型」の情報メディアが共感を呼ぶようになる。これまでと比べ、「楽しむ」育児を強調するのが90年代型育児メディアの特徴ともいえる。

また、90年代以降、男女共同参画が言われるようになり、男性の育児参加もさかんになった。出版業界でも2000年代に入り「子育てする父親」を焦点にした雑誌が登場することとなる。この時期従来ビジネスマン向けの雑誌を発行していた出版社から育児・教育情報誌が相次ぎ創刊された。例えば、『日経 Kids+』『プレジデント Family』などである。誌面では育児に協力する父親から「(夫婦)二人で育児」の言説が父親関連記事で見られるように

⁸ 高橋均「資源としての育児雑誌－育児雑誌の分析から－」『育児戦略の社会学』世界思想社、2004年、p41-73。

⁹ 田口祐子「『キッズビジネス』と七五三」『女性と経験』42号、女性民俗学研究会、2017年、p16-31。

なっていく。高橋均は、こうした子育ての記事にあらわれる父親像が「育児する父親の分極化状況」として、競争社会において子どもの教育戦略を主導する存在と、また子育ての楽しさを至上のもとして楽しむためのモノの消費にも積極的な存在とに分極化している状況について言及している（高橋 2013: 335）¹⁰。

このように誌面をとおしてその時々の子育て状況を映し出す育児雑誌であるが、現実の問題として、最近では発行数が減少し続けている実態がある。育児雑誌をめぐる昨今の様子について、現場の声からみてみることにする。

1985 年から医者という立場で記事のための取材などを受けてきた山中龍宏は、最近送られてきた育児雑誌が最盛期の厚さの 1/3 しかないことに驚いたという。実際 2000 年代には休刊が続き、2002 年『私の赤ちゃん』『Balloon』、2003 年『ベビーエイジ』『プチタンファン』『マタニティ』などが休刊となっている。最盛期といわれる 1980 年代に若い親たちにとって必要な医学的に正しい情報を伝え、育児不安や負担を軽減することが育児雑誌の意義と考えていた山中にとって、インターネットやスマホの普及で、雑誌を買わずとも検索して豊富な情報が得られるようになった現在、その意義は薄れてしまったとし、「育児雑誌で情報発信する時代は終わった」とまでしている¹¹。

一方、同じく現場で働く言語聴覚士の中川信子は、必要な時にすぐ検索をして情報が得られるスマホなどは大変便利であるものの、得られた情報はこま切れのものであることから、系統立てて全体を見通すことの必要性を訴えている。その役割を担えるものの一つとして、紙媒体の育児雑誌の存在意義について述べている¹²。

本稿で取り上げる『赤ちゃん和妈妈』は、2000 年代いくつかの育児雑誌がその役割を終えたような形で、あるいは新たなコンセプトの育児雑誌と交代する形で休刊していく中も、コンスタントに発行を続けている。後述するように、フリーペーパーとして対象者に直送する形態をとってきたことが、長期間における継続した発刊を可能にした大きな理由の一つと考えられる。

2. 『赤ちゃん和妈妈』という雑誌について

本稿で取り上げる育児雑誌『赤ちゃん和妈妈』（赤ちゃん和妈妈社）は 1966 年創刊の月刊誌で、日本で最初に刊行された育児雑誌といわれる。誌名は 2022 年 5 月から『赤ちゃん！』に変更し、現在に至っている。購読も可能だが、全国の健康保険組合の保健事業の一つとして赤ちゃんのいる組合員世帯にフリーペーパーの形で直送されるようになっている。

¹⁰ 高橋均「父親向け育児・教育雑誌における父親像の分極化」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』65、2013 年、p334-335。

¹¹ 山中龍宏「日々のつぶやき—障害制御考 育児雑誌との関わり」『小児科臨床』第 74 巻 7 号、2021 年、p113-115。

¹² 中川信子「安心子育てを手伝うために (5) 育児雑誌に親しむ」『地域保健』2014 年 2 月号、p73-77。

年間出生数 84 万人のうち 18 万世帯が対象であり、全国で広く読まれ続けている育児雑誌である（2020 年時点）。

創立時の編集者でのちの編集長である小山敦司によると、1960 年代半ばにアメリカに移住した妹から妊娠の知らせとともに届いた雑誌が、雑誌創刊のきっかけであったという¹³。『アメリカンベビー』『ベビートーク』といったタイトルのついた雑誌はいずれも「ドラッグストアマガジン」といわれるもので、週刊誌よりやや薄目で、アメリカのドラッグストアにて気軽に手に取れるようにおかれていた育児雑誌だった。雑誌とともに妹からの手紙には「この雑誌があるのできちんと育児しています。安心してください。」と書かれていたという。小山の父は当時出版社を再スタートさせようと考えていたものの、当初赤ちゃんが雑誌の対象として成立するとは考えていなかったという。その理由として、「(1960 年代) 当時は育児などは親や近所からの助けを借りて女性がやるものだと考えられていたからです。病気のことはお医者さん、生活のことはおばあちゃん、という分業で育児が行われていた時代でした。」としている。しかし、実際のところ当時は都市化・核家族化がすすみ、頼る先が少ない中で出産・育児に臨まなければならない、不安な状況に母親たちは追い込まれていた。そこで小山と父は妹から送られてきた「ドラッグストアマガジン」をみて考えを変え、「こんな雑誌を日本のお母さんに届けられないか、きっと喜んでくれるに違いない」との思いをもち模索がはじまったという。

当時は育児雑誌というものは日本にはなく、どのような内容を、どのようなスタイルにしたらたくさんのお母さんに読んでもらえるのか、手探りのスタートとなりスタイルが落ち着くまでに 5 年かかっている。

小山によれば『赤ちゃん和妈妈』が最初にめざしたのは、「育児の迷信打破」であったという。当時「火事をみると赤いあざの子どもが生まれる」などの迷信がまことしやかに出版物などに載っていた。そのような迷信を極力排除し、医学をきちんとまちがいをなく教え、子どもの発育などを知らせていく雑誌と位置付けたいと考え、病院の医師たちに柱になってもらい、2 時間ほど医師たちの話を聞いた後に雑誌の編集会議を行なうという形をとったという。

筆者が手に入れた 1975 年 1 月からの『赤ちゃん和妈妈』の目次や記事を見ると、医療や発達の専門家による記事が多いものの、子育てに悩む母親たちに向けた記事、例えば「特集 母になるということ 母親って最初からそんなに強いものではありません」（1975 年 2 月号）、「ママになった方へのおしゃれ提言」（1975 年 5 月号）、また成長の節目の時期と関係した人生儀礼や年中行事などに関連した記事も特集などで取り上げられる構成となっている。先述したように創刊時には、科学的正しさを重視したとしているが、その後 2000 年ま

¹³ 本ページにおける『赤ちゃん和妈妈』に関する記述は以下参照。「おかげさまで 45th 赤ちゃん和妈妈社は 45 周年を迎えました！前編」『赤ちゃん和妈妈』2010 年 10 月号、p2-3（引用部分は p2）。小山朝史「(株) 赤ちゃん和妈妈社 日本初の育児雑誌創刊から若いママ・パパ世代の応援に事業広げる」『商工ジャーナル』2014 年 4 月号、p58-60。

で子どもに関する儀礼や行事について解説する連載が絶えず組まれており、伝統的・慣習的な育児知識についても内容に盛り込まれていた。

3. 『赤ちゃんとママ』における人生儀礼記事に関する調査の方法

『赤ちゃんとママ』における人生儀礼に関する記事の特徴と変遷をみるために、筆者は1975年1月から2022年4月にかけて、ほぼすべての号の全頁を対象に、記事の内容を確認した。『赤ちゃんとママ』は1966年創刊であるが、今回手に入れることができたのが1975年1月からであることと、『赤ちゃんとママ』は2022年から雑誌名を『赤ちゃんと！』としていることから、対象期間を1975年1月から雑誌名が変わる前の2022年4月までとした¹⁴。

資料収集の方法は、全頁を対象に人生儀礼に関する記述や写真等があれば抽出する形をとった。写真の場合、基本的には何についての写真かは付された説明を元に判断したが、説明がなくてもその儀礼や行事を示すと考えられる構図が含まれている場合、例えば大きな尾頭付きの鯛が並び大人が赤ちゃんの口に何かを挟んだ箸を運んでいればお食い初め、クリスマスツリーの前でポーズを取っていればクリスマス、という形でも判断した。また、今回は子どもの人生儀礼に関する記事の収集が目的であるが、初節句と関連するひなまつりや子どもの日、七五三などは年中行事としても分類されることがあることから、あわせて年中行事も収集した。なお、今回の調査で広告についても多くの人生儀礼に関する情報が含まれている様子がみられ、分析の対象とする必要性を感じたが、今回の資料の分析量の多さから次回以降の課題とすることとした。

収集した資料について分析した結果、人生儀礼に関する記事は、大きく3つのタイプに分けることができた。記事のタイプ別掲載動向を示したのが図1である。

1つは、特定の人生儀礼を取り上げ、その内容を解説し、また込められた意味などを説明する記事である（Aタイプ）。このタイプは2000年ぐらいまで多くみられ、かつて各地で行なわれていた子どもに関する民俗でありながら、都市化、核家族化がすすむ中、若い親たちに知られなくなったりした儀礼のいわれや内容を、そこに込められた当時の人々の思いと共に紹介するものである。

2つ目は、読者の子どもの節目の祝い事の様子を撮影した写真を掲載した記事である（Bタイプ）。当初対象とした期間の多くの号で、散発的にでもこのような投稿写真がみられるのではと考えていたが、資料収集をしてみると最も早いもので1990年であった。掲載時期と形態の変遷をみていくと、1990年代では読者ページへの写真投稿のような形がまずみられ、その後1・2ページを使って読者の子育ての様子を紹介する記事の中に、子どもの祝い事の写真も載せるという形をとることが増える。

¹⁴ 『赤ちゃんとママ』のバックナンバーは国立国会図書館所蔵のものを利用したため、対象期間は国立国会図書館が所蔵している期間となった。なお1983年1月号は欠号となっている。

図1 『赤ちゃんとママ』における 人生儀礼に関する記事のタイプ別掲載動向 (1975～2022.4)

年	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984
A 解説										
B 読者写真										
C 紹介・提案										

年	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994
A 解説										
B 読者写真										
C 紹介・提案										

年	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
A 解説										
B 読者写真										
C 紹介・提案										

年	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
A 解説										
B 読者写真										
C 紹介・提案										

年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	22
A 解説								
B 読者写真								
C 紹介・提案								

* 上記の表は各号でのA,B,Cタイプの記事の有無を示す。各号でA,B,Cタイプに該当する記事が1つでもあれば、該当するタイプ別の該当する年月欄に色をつけた。1983年1月号欠号のためデータなし（黒）。

* それぞれの年は月別に12に区切られており、1目盛り分は1か月分を表す。目盛りは左から右へ1から12月へと並んでいる。

3つ目は数としては少ないが、祝い方の紹介また祝う際に必要なもの、あるとよいものについて取り上げる記事である（Cタイプ）。例えば、1975年3月号の「初節句の着物」は子どもに着せる着物の寸法と作り方の紹介となっている。他に例えば、子どものお祝いでのよい写真の撮り方を紹介する記事などがある。Cタイプは初めのうち祝う際の注意点を紹介することが多かったのが、後半にはデジカメやスマホなどで、祝い事の様子を撮影するとき

のアドバイスを紹介する記事が増えていく。

A、B、C タイプの記事の掲載のされ方として、図 1 からわかるように 2000 年まで A タイプが多く、そのあと入れ替わるように B タイプの記事のタイプが増える。また、C タイプは初めから現在に至るまで時折みられるのみで、数は少ない。

4. 子どもの人生儀礼について解説する記事について

まず本章では A タイプ、人生儀礼についてその内容を解説する記事を見ていくこととする。

筆者は 1975 年 1 月からの記事を見てきたが、子どもと人生儀礼について解説する記事はまずその 1 月号の中でみつけることができる。『児やらい』などを記し当時の産育に関する第一線の研究者であった大藤ゆきが「出産と赤ちゃんにまつわる儀式」というタイトルで執筆しており、明治以前の日本人の子育ての経験と知恵の積み重ねが西欧流の育児書の氾濫や戦後の核家族化により伝わりにくくなっていると指摘している。記事の中で昔の母親たちは子どもを神からの授かりものとして信じていたと考えられ、それに対し「現代人は、この怖れと慎みの心を失い過ぎている」とし、「帯祝い」「産神」「お七夜」などについてかつて込められていた思いとともに産育習俗を紹介する構成となっている。

1975 年 9 月の雑誌編集部による「マチの育児・ムラの育児」では、昔の子育ての知恵と今のメディアを通じての知識を有機的に繋げられないだろうかとした考えが述べられており、編集部の雑誌制作における当初の思いを推し量ることができる。

その編集部の思いが表現された形でもあったと考えられる、子どもに関する人生儀礼や年中行事について取り上げ解説する連載が 2000 年になるまでたびたびみられた。連載同士は基本的に重ならず、1 つが終わるとあまり間隔をあけずに、類似のタイプの連載が続く形となっていた。

まず 1980 年 4 月から「子どもにまつわる行事」というタイトルの連載が 2 年続く。筆者澤田啓司は、小児科医であると同時に全国各地を実際に歩き、産育に関する民俗について造詣が深い人物である。本連載は澤田が全記事を担当している。記事の大きさは 1 ページの 2/3 程度で大きくはないが、読者ページの中に掲載され、夏には夏越しの祓、1 月には羽根つきと破魔矢、3 月にはひな祭りなど季節を意識して、1 記事 1 行事（儀礼）という構成となっており、本業の医学的な話はほぼ含めない内容となっている。

そのあとの 1983 年 2 月から連載が始まる「育児風土記」は民俗学研究者や博物館学芸員など民俗に関する専門性の高い著者陣が担当する形で 2 年間続く。先の連載同様読者ページの中の同じぐらいの大きさの記事であるが、ページをまたぐ形での掲載となっていて少々読みにくい感がある。各記事のタイトルは「○○の子育て」（○○には地名が入る）となっており、一地域を取り上げその中でみられる子育ての特徴を示したものである。急速な情報の流入と浸透による画一的な子育てが広がっていた当時の状況に、かつてはそれぞれの地域で特色のある子育ての民俗があったことを知ってもらいたい意図が感じ取れる。

1986年1月から1年続いた「世界の育児あれこれ」は世界各国の古くから伝わる産育習俗を取り上げるということで他の連載の中で異色の感がある。筆者は世界各地で生活経験のあるエッセイスト小椋七恵で、毎回1か国の1儀礼を取り上げ、その儀礼の解説とともに地域での実際の祝い方や祝いを経験した感想などを織り交ぜて紹介している。第1回目ではアメリカのハロウィンを扱い、儀礼の解説のほかそれぞれの家で飾る大カボチャの話、子どもたちが考え抜いた仮装をしてお菓子をもらいに近所をまわる様子を紹介している。

次の「育児北から南から」は1987年3月から2年ほど続き、毎回1・2都道府県を選び、その地域の子育てに関する今昔のことを紹介する。これまでの連載のように、古い時代の子育ての知恵や民俗を紹介することは必須ではないようで、その回の記事担当者が民俗に関心があれば地域に伝わる子育ての民俗などを紹介し、そうでなければ現在の地域の特徴を中心に話はすすむ。

このあと1年おいて1991年1月から「子ども&祭り」が2年、そのあと「子どもと行事」が続く形で連載される。先の「子ども&祭り」は、都市化がすすむ1990年代に子育てをしている親たちにとって、このコーナーでなければ聞かないような行事「左義長」「お茶講」「田植え祭り」などを取り上げ解説している。毎回1ページ仕立てで、大きな写真と民俗学関連の専門家らによる説明がつく構成になっている。必ず取り上げる行事の中での子どもの役割の説明があり、社会の中の子どもの位置づけの変化、子どもを取り巻く社会の変化に気づかされる内容となっている。続く1992年からの「子どもと行事」は「子ども&祭り」と構成は似ているものの、「ひなまつり」「七夕」「七五三」など都市で暮らす若い家族にも知られている行事を取り上げ、その由来や特徴、祝い方などについて紹介するものとなっている。著者名は特に書かずに、より平易な説明となっている。

1996年から約4年続いた「いま育児むかし」は児童史研究家の上笙一郎が担当した連載であり、1回目の「鯉のぼり」から毎回子どもに関する民俗的事柄を取り上げ、その由来や昔の人たちがその民俗に込めていた思いについて紹介している。上は書かれた記事について「ひと昔前にはごく当たり前のこととして知っていた育児の知識の技を、今の若い親は知らなくなっています。この記事を書くにあたって、何十年かの変化のうちに急速に忘れられている育児の知恵を何とかして伝えたいと考え、積極的に取り上げました」と述べている。

このようなタイプの連載記事は2000年に入る前まででみられなくなり、それ以降は単発の記事となって連載という形はなくなる。そしてそれとともにこうした記事の数自体が減少していく。

5. 子どもの人生儀礼に関する写真を掲載した記事について

Aタイプの記事と入れ替わるように増えるのが、Bタイプの記事である。主に読者の子どもの節日の祝い事の様子を撮影した写真が掲載された記事類となっている。

写真の中に撮られた人生儀礼や年中行事の種類によって、記事を年毎に分類したのが図2である。図2から1975年以降最初にみられた読者による儀礼や行事に関する写真は、1990

図2 『赤ちゃんとママ』の人生儀礼・年中行事に関する読者関連写真掲載の種類と動向（1975～2022.4）

年	初節句	お宮参り	命名	初誕生	正月	七五三	お食い初め	クリスマス	誕生日	へその緒	安産祈願	節分	ハーフバースデー	ハロウィン
1975														
1976														
1977														
1978														
1979														
1980														
1981														
1982														
1983														
1984														
1985														
1986														
1987														
1988														
1989														
1990														
1991	1													
1992														
1993	1													
1994	1													
1995		1			1									
1996					1									
1997						1								
1998						1								
1999		2												
2000	1	1					1							
2001														
2002														
2003														
2004														
2005														
2006														
2007		1		1										
2008														
2009	2						2	1	1					
2010	2	1												
2011	1	1	1	1			4							
2012	2						2							
2013	1	4	1	2		1	4	1		1	1	1		
2014	1	1	2			2	2						1	
2015		3					5	1				1		1
2016	1	2	1	1	1	1	2							1
2017	1	6	2		2		2	1	1				1	
2018		5		1			1				1		2	
2019				2	1		4						1	
2020	3	3					9	2	2			1	1	
2021	3	6	1				5		4			1	2	
2022	1	2					2							

*表中の数字は各儀礼・行事の写真がその年に掲載された回数を示す。なお、回数が3回以上のものは分かりやすいように欄に色をつけた。

年 7 月の初節句の際の写真となっている。この写真は読者がコメントや写真を寄せるコーナーに掲載されたものである。「バブバブフォーラム」と名付けられたこの読者ページは、対象とした期間すべての号で必ず掲載されているおなじみの頁であり、その中の写真投稿のコーナーも長く現在に至るまで続いているものの、その写真投稿コーナーの中に、先述の 1990 年以前初節句、お宮参りやお食い初め、七五三等、儀礼や行事の写真は長くみられなかったのである。また、1990 年以降も「バブバブフォーラム」では子どもの儀礼や行事の写真はみられるものの、掲載回数は少なく 1 年に数枚程度で、該当する写真が 1 枚もない号も多々みられた。現在は若干であるが増加の傾向がみられる。このコーナーにおける写真の特徴は、赤ちゃんが粹いばいに写っていること、そのかわいらしさや思わずとったポーズのおもしろさを強調していること、背景やその他家族が同じ写真の中に写っていることが少ないこと、となっている。

図 2 をみると儀礼や行事の写真は年を追うごとに増加していくことがわかるが、この増加は先の読者ページによるものではない。これらは 1990 年代、2000 年代にみられ始めることになる読者ママやパパのライフスタイルを紹介するタイプの連載記事の中で掲載された写真によるものである。

こういった連載の中で早いものは、1991 年 3 月から始まる「ママのライフスタイル」である。一人の読者ママに取材し、そのママと家族の簡単なプロフィールに加え子育ての様子を文章と写真で紹介する記事となっている。例えば 1999 年 2 月の記事には、「荒れた妊娠期。でも今は子どもと一緒に成長しています。」とした見出しがつけられ、若くして結婚出産した女性の話が掲載されている。きれいごとではない子育ての様子をその読者ママの実際の経験に沿って紹介する記事となっている。また、多くの場合その読者ママの一日のスケジュールを時間の流れとともに紹介したのも載せられている。この 1999 年の記事には親子 3 人でお宮参りをした際の写真が掲載されている。

儀礼や行事の写真掲載があった他の連載として、2009 年 7 月からの読者パパと子どもの様子を数枚の写真と説明とともに掲載する構成の「papa album」がある。

「papa album」はパパと子どもと一緒に家や外でポーズをとったり、自然な様子で過ごしたりしている 5 枚ほどの写真で構成されている。文章はほとんどない。それぞれの写真には、例えば「並んでスヤスヤ 生後 2 週間ちっちゃいね。男 2 人でお昼寝中。」「○○○です（○には子どもの名前） おばあちゃんが書いてくれたすばらしい命名書を前に。」といったコメントが付されている。必ずパパから子どもに向けたメッセージが掲載されている。ほとんどの記事や写真にはママが登場しない（ただし親子プロフィールに親子 3 人の名前と年齢を掲載）が、パパと子の自然な表情や様子から撮影者がママであることが推察される。この連載には、儀礼や行事の写真が掲載されることが多く、後述する「パパ武者列伝」と併せて、儀礼と行事の写真掲載回数を増やすきっかけとなっている。

2012 年からの「パパ武者列伝 パパボンド」は「育児道を極める」と副タイトルがつけ

られ、記事タイトルの説明として、「パパボンド」とは「バガボンド（“Vagabond”放浪者、さすらい人）にパパをかけた造語。このコーナーでは、仕事も子育ても頑張るパパたちの姿を紹介します。」とある。2 ページ構成の 1 ページ目では、パパの仕事や普段の活動の様子を子育てに関する思いと共にインタビュー形式で紹介し、2 ページ目に子どもや家族の写真が掲載される。この写真類は大きく構成上 2 つにわけられている。1 つは普段のパパと子どもの生活の様子を撮影した 5 枚ほどで、例えば「あるパパの一日」などとして起床から就寝までの子育てに関する事物を入れた写真が掲載されることもある。2 つ目は「〇〇家写真館」と題して家族を意識した 4 枚が掲載されている。儀礼や行事に関する写真は、「〇〇家写真館」の方に掲載されるようになっている。これら写真にはママや赤ちゃんの兄・姉のほか、祖父母なども写ることがみられる。2020 年 4 月まではママからパパに向けたメッセージが掲載されていた。これらの写真は、ママも一緒に写っている場合があることから、取材者が撮影したものと思われるが、「〇〇家写真館」は家族で撮影したものから選んで掲載していると思われる。

図 2 では儀礼や行事に関して読者から投稿された写真の掲載時期のほか祝い名がわかるように示した。図をみると初めの数年は初節句に関連したものが目立つ。祝い事に関連した広告でも、比較的多いのは例年ひな人形や兜などとなっている。1995 年からみられるようになるお宮参りはその後安定して多い写真となっている。

同図をみると 2007 年から祝い事の写真が増え続け、またその種類も年を追って増えていくことがわかる。特に目立つのは先のお宮参りとお食い初めである。これらの写真にみられる特徴をみてみたい。

お宮参りの写真は多くの場合、赤ちゃんを中心に着物などで正装したメンバーがそろった形が目立つ。他の儀礼に比べ、祖父母が写真に入ることが多くなっているが、パパママ赤ちゃんだけの写真もみられる。「papa album」や「パパ武者列伝」には、参加者の集合写真ではなくお宮参りのワンシーンといった形でパパと赤ちゃんだけのツーショットもみられるが、赤ん坊がお宮参りならではの装いをしているため、コメントがなかったとしてもお宮参りの写真であることがすぐわかる。

お食い初めはお宮参りと並んで多い写真である。お食い初めの写真では必ずといってよいほど、鯛の尾頭付きが写真の中央に配置されており、その鯛を前方におき、後ろに赤ちゃんやパパやママがうつっているという構図が多い。中にはパパが赤ちゃんに料理を食べさせようとスプーンや箸を口に運んでいるところをとった写真も目立つ。

図 2 では人生儀礼のほか年中行事もピックアップしているが、その数は人生儀礼に対して少ない。初めのうち、ほとんどみられなかった年中行事（初正月、節分、クリスマスなど）も 2013 年以降いくらかみられるようになっていく。

6. 人生儀礼記事に対する考察

以上育児雑誌の中の、人生儀礼に関する記事について抽出し整理してきた。

抽出と整理では、主に記事の内容でタイプ分けし、タイプごとの記事の掲載時期を目安に変遷がわかるように並べた。このような抽出と整理をとおして、かつて行なわれていた人生儀礼の内容を解説する記事（Aタイプ）が2000年までよくみられていたものの、その後みられなくなったことと、それと入れ替わるように読者の子どもの儀礼に関する写真の入った記事（Bタイプ）の増加がみられることがわかった。また、祝い方の紹介や必要なものを取り上げる記事（Cタイプ）については、現在もみられるものの記事数が一定して少ないことがわかった。

人生儀礼の内容を解説する記事を掲載したことの理由として、編集者側は明治以前の日本人の子育ての経験と知恵が戦後核家族化の進行により、伝わりにくくなったこと、儀礼の根底にみられた「怖れと慎みの心」が失われてきていることに対する危惧を挙げている。

育児雑誌が創刊された当初は、正しい医学的知識を伝えることが大事とされ、それを正確に子育てに反映させることが理想とされていたが、子育てはマニュアルどおりに進むわけではなく、「正しさ」にふりまわされてしまう現象も起きていた。この当時編集者側は、そうしたことに対する答えを古くからの儀礼の中に見出そうと考えていたのであろう。しかし、記事の変遷をみると実際はそうしたものは別の方向から、読者たちは子育ての参考になる情報を見出していたといえる。

読者の子どもの儀礼に関する写真の入った記事には、現在親たちが探し求めているがらつかめないでいる子育ての理想に近づくためのヒントが隠れているように思われる。『赤ちゃんとママ』では1990年代から読者に取材しそのライフスタイルを紹介する記事による多くの連載がみられた。その多くが長期の連載になっていることから、この記事形態が読者に求められているものであることはまちがいない。

女性の社会進出がすすみ、男女が協力して子育てをすることが一般的になるなか、それぞれの家庭での子育ての形はいよいよ多様なものになっている。また、インターネットやスマホの普及により、必要な情報は検索することにより瞬時に得られるものにもなっている。読者にとって以前の画一的な「正しい」子育ての情報を掲載した記事の重要度は下がり、その一方で他の子育て家族がどのような生活を送り、どのような子育てをしているのか垣間見て、自分の日々の生活と重ね合わせることができる記事が求められるようになった。読者はそういった記事の中に共感できる場所を探し安心したり、気づいたことや感じたことに応じて自分の普段の子育てを微調整したりするのではないだろうか。

読者の普段の生活取材した記事からみえてくることは、現在の親たちが子育てについて知りたいと思っているのは、「何が答えか」というよりも、「どこまでが答えか」ということである。現在子育ての多様さが言われるようになり、あるべき子育ての姿は画一的に示されなくなったものの、共有された基準が全くなくなったわけではなさそうだ。

高橋は「育児言説とは、権力関係を通じて育児にかかわる知識が恣意的に選択、再配置された結果としてたちあられ、育児エージェントの実践のあり方を統制し、枠づけていく

「書かれた/話されたこと」(p78)¹⁵と定義した上で、育児雑誌はこの育児言説が目に見える形であられる空間であるとしている。高橋がここでいう、権力関係は気がつかないうちにも親たちの行動を一定の方向に動かす圧力のようなものであり、育児エージェントとは子育てをしているパパやママのことである。育児言説は、かつて社会あるいは国家の維持・発展に寄与する育児実践につながる場合にみられた垂直的・啓蒙的であった状態から、70年代以降の育児雑誌登場の頃には唯一絶対的な基準をもたない共感的・水平的なものへと移行した。

ところで、かつての垂直的言説では、あるべき育児の姿を枠づけする「見える」統制装置がみられたが、現在の共感的・水平的言説ではあるべき姿の枠づけが弱い「見えない」統制装置への移行がみられるという¹⁶。つまり、上からの形で権威的に正しい育児の形が示され、時には強制される状態にくらべ、今は自由であるように見えながら、そこには統制装置が潜在化しただけで、依然存在しているということである。現在育児は多様で自由でもありながら、実は見えない形で存在するあるべき育児の姿を親たちは手探りで探し、それは見えないだけにかつてははっきり示されていた時よりも見つけ出すことが大変な場合もある。そして統制装置から離れ境界からはみ出てしまうことは、親たちを不安に陥れるという訳である。親たちはどこまでが答えか探しながら、ぼんやりとした枠の中で自分たちらしい子育ての姿を模索しているといえよう。

『赤ちゃん和妈妈』の子育ての様子を紹介した記事の中に、繰り返し子どもの人生儀礼に関する写真が掲載されていることは何を意味するのだろうか。一つ言えることは、現在子育てをしている親たちにとって、子どもの成長の節目を祝うことはぼんやりとした指針しか示されない現在のあるべき育児をする上でわかりやすい指標となっているということである。そして、その様子を撮影した写真から得られる情報を親たちは求めているということである。

ここまで述べてきたように、子どもの人生儀礼に関する写真があるべき子育ての姿に近づくための1つの指標であるという前提に立つならば、儀礼に関する写真であっても、ただ子どものかわいらしさやポーズのおもしろさが伝わるのみの写真は、子育てをしている一般の読者からは必要とされない。図2で2007年から急速に増えている子どもの人生儀礼に関する写真は、赤ちゃんのみならず、家族の姿、家の中の様子、出かけている先の様子など背景も写りこんでいる場合が多い。読者である親たちは、子どもの儀礼をするにあたってそれら写真から必要な情報を得ようとしているのである。そして、得た情報によって、自分のイメージしている祝いの様子とすり合わせ、イメージができていなかった部分はその情報から補うなど微調整を加え、自分の考えた形で祝うということにつながると考えられる。

¹⁵ 高橋均「育児言説の歴史的変容－『育児雑誌』から『ベビーエイジ』へ－」『育児戦略の社会学 育児雑誌の変容と再生産』世界思想社、2004年、p74-104。

¹⁶ 前掲15、p102-104。

このように考えるならば、子どもの人生儀礼の様子について情報量の多い家族写真は、今後も掲載されていくと考えられる。

おわりに

本稿では、子育てしている親たちに長期間にわたり読み継がれている育児雑誌『赤ちゃんとママ』の記事を活用して、現在の子どもの人生儀礼の意義やその変遷について知るため、情報収集し考察をした。

1960年代後半から顕著にみられるようになった都市化や核家族化により、それまで親や身近な親族、地域から得ていた育児知識の伝達経路を失った子育て世代は、同時期に発行されるようになった育児雑誌を新しい情報源として育児を行なうことが増えた。本稿で資料とした1966年創刊の『赤ちゃんとママ』をはじめこういった育児雑誌は、それまでの読者層が高学歴層に偏っていた育児書とは異なり、平易で身近な話題が多かったことから幅広い読者層を獲得していくようになり、現代の育児状況の様々な側面を映し出す媒体として位置づけられるようになった。

本稿で『赤ちゃんとママ』の中の人生儀礼に関する記事を収集整理したところ、記事のタイプを3つに大きく分けることが出来た。子どもの人生儀礼について、その内容を解説する記事、祝いの様子を撮影した写真を掲載した記事、祝い方の紹介また祝う際に必要なもの、あるとよいものについて取り上げた記事である。記事の量として、前2者が多く、初め儀礼の内容を解説する記事が多く、2000年頃を境に読者が祝いの様子を撮影した写真に関連した記事が増えていく。創刊の頃から現在に至る育児雑誌全般の内容の変化とあわせて考えると、初めみられた垂直的・啓蒙的な内容は減り、かわって共感的・水平的な内容が増えたことと符合する。

現在の子育てのスタイルは多様で自由になったように見えるものの、実際のところ基準がなくなったわけではない。あるべき育児の姿が潜在化してみえにくくなった分、親たちはどこまでなら許容されるのか、自分たちの考えや理想とすり合わせながら、自分たちらしい子育ての姿を模索しているといえよう。今回の雑誌記事からわかったことは、このような潜在化してわかりにくくなっているあるべき子育ての姿に関して、子どもの人生儀礼がわかりやすい指標となっていることである。記事に掲載されることが増えている子どもの人生儀礼の写真について、今回特に「お宮参り」と「お食い初め」の写真が多かったことについては、今後さらなる資料収集と分析で明らかにできることが増えると考えられる。今回の雑誌記事に関する調査で得られた情報量は大変多く、このほか特に言及しなかった広告の類やCタイプの記事についても、整理を続けていきたいと考えている。